

わが国初の本格的大学博物館の誕生について

—早稲田大学演劇博物館開館の歴史的意義—

守重 信郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Establishment of the First Major

University Museum in Japan

—The historical meaning of the opening of Waseda University Theatre Museum—

MORISHIGE Noburo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this study is to examine the history of the Tsubouchi Memorial Theatre Museum of Waseda University and discuss the establishment of this first major university museum in Japan from the historical perspective, while focusing on the educational philosophy of Shouyo Tsubouchi (1859-1935), professor emeritus of Waseda University. During the early period of university museums, there already existed a university museum which was comparable to current general museums in organizational systems, budgets, and publicity. That was the Tsubouchi Memorial Theatre Museum of Waseda University, which was opened in 1928. This museum was the first university museum in Japan that had firm organizational structures and budgets, introduced a new style of comparing and studying a specific subject from the international viewpoint and was open to the public as a social education facility. This museum was established based on the ambition of Tsubouchi and his supporters, who considered that a theatrical museum was necessary to popularize theater and develop the study of theater and they hoped that the museum would not be a mere college facility but a representative Japanese university museum.

1.はじめに

大学博物館は大学に設置された博物館であり、学内に対し教育・研究に資する資料を提供するとともに、学外に向け高等教育の成果を社会に発信する機能を持つ。平成8(1996)年に、第14期文部省学術審議会学術資料部会が、中間報告『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』を提出したことを見ても分かるように、近年、この大学博物館への関心が高まっている。このことは、わが国の教育界において社会の少子高齢化、科学技術の高度化に伴い、生涯学習体系への移行が急務であるだけでなく、生涯学習と高等教育との密接な連携が求められている

ことを意味している。高等教育と社会との接点として、今、大学博物館に積極的な活動が求められているのである。

しかしながら、多くの研究者が指摘するように、大学博物館はおのこの館により活動が異なっている。とりわけ、学外への教育普及活動においては積極的な館もあれば、ほとんど活動を行わない館もある¹。そこには大学の方針により活動が制限されるという、他の一般的な博物館とは異なる大学博物館固

¹緒方の調査によれば、アンケートに回答した館の34%が教育普及活動をしていない。(緒方泉編『日本ユニバーシティ・ミュージアム総覧』昭和堂 2007 p.431)

有の問題点も指摘される。言い換えれば、わが国の大学博物館は全国共通の理念なしに、各大学の意向で、その活動が制約されているということになる。しかし、その反面、社会に「開かれた大学」という理念の下で、大学に対する社会貢献が一層求められている今日においては、もともと大学博物館に備わっている研究・教育に関する本来的な機能を積極的に生かすようなニーズも存在する。現在、大学博物館は大学の経営方針に制約されることなく、他の一般的な博物館とは異なる研究・教育機能を生かした多様な活動を展開することが求められているのである。

ところで、本稿が課題として挙げる大学博物館固有の研究・機能の解明を歴史的な視点から考察してみると、昭和初期において、組織や経済基盤、そして教育普及活動において、すでに現在の一般博物館にも引けをとらない大学博物館が存在していた事実が指摘される。「早稲田大学坪内博士記念演劇博物館」（以下、「演劇博物館」と略す）である。昭和 3（1928）年に開館し、現在まで活動を継続している演劇博物館は、わが国最初の私立大学の大学博物館であり、開館当初から「組織」「開館規定」「後援会」といった運営基盤が確立され、日曜祝日を含み一般に広く無料で公開された。演劇博物館は、開館当初から本格的な博物館としてスタートしており、まさにわが国の大学博物館の先駆的存在であると位置づけることが可能である。

この演劇博物館に関する先行研究としては、当時の関係者の記録をもとに開館の経緯をまとめた菊地明「演博開館ものがたり」（1977）を挙げることができる。菊地は、演劇博物館 50 周年の記念として、この演劇博物館建設構想の段階から博物館の開館までの経緯を、坪内逍遙を中心に当時の関係者の記録から辿ったものである。また、竹内登志男「館長としての父」（1977）の研究は、初代館長を務めた竹内繁俊を取り上げ、当時の演劇博物館開館における苦心と抱負などをまとめたものである。また、『演劇博物館五十年』（1978）、『早稲田大学百年史』（1987）、『演劇博物館資料ものがたり』（1988）、『早稲田大学演劇博物館』（2001）、「全世界は劇場なり」（1999）などは、いずれも演劇博物館の開館構想から開館までの

経緯を当時の記録を元に辿っている²。

本稿の目的は、これらの先行研究では研究対象となっていない演劇博物館開館の意味を、研究・教育機能の側面から歴史的に再評価することである。すなわち、昭和初期において、それまでは存在していなかった本格的な大学博物館誕生の背景を解明しながら、大学博物館に求められた新たな社会的役割が何であったかを明らかにすることである。本稿における具体的な課題は、以下の二つの事柄である。

第一には、この演劇博物館開館の経緯を辿りながら、その研究・教育機能の実態を解明することである。第二には、この演劇博物館が早稲田大学名誉教授である坪内逍遙（1859～1935）により設置されたという事実から、坪内における大学博物館に対する「思い」を探り、なぜ坪内が大学博物館の開設に尽力したかを解明することである。坪内の思想を明らかにすることは、わが国初の私立大学における大学博物館開設の歴史的意味を探る作業となろう。

本稿の課題の持つ「ねらい」は、当時の大学博物館に求められた機能と役割の変容を歴史的に解明することであり、わが国初の私立大学の大学博物館が、その後の大学博物館の開設に、いかなる影響を与えたかを合わせて解明することである。本稿のように、大学博物館の歴史の中で演劇博物館開館の意義を位置づけた先行研究は存在しておらず、本研究の学術的意味は高い。なお、本稿における一次史料は、早稲田大学・大学史編集所『早稲田大学百年史』、演劇博物館が開館当初に年 4 回発行した館報『演劇博物館』などである。

2. 演劇博物館の開館

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館は、昭和 3

²菊地明「演博開館ものがたり」『悲劇喜劇 11 月号』浩文社 1977・河竹登志夫「館長としての父」『悲劇喜劇 11 月号』浩文社 1977・早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』早稲田大学 1987・早稲田大学演劇博物館編集『演劇博物館資料ものがたり』早稲田大学演劇博物館 1988・早稲田大学演劇博物館編集『演劇博物館五十年』早稲田大学演劇博物館 1978・『早稲田大学演劇博物館』早稲田大学演劇博物館 2001・菊地明「全世界は劇場なり坪内逍遙と演劇博物館」『芸術新潮』1999 年 5 月号 新潮社 1999 pp.22～27

(1928)年に早稲田大学校内に開設されている。この演劇博物館は、当時の早稲田大学名誉教授・坪内逍遙の古希と、坪内の『シェークスピア全集』の翻訳の完成を祝い、坪内を国劇向上の功労者として顕彰するために建設されたものである。建物は坪内の発案によるものであり、16世紀イギリスのエリザベス王朝時代のシェークスピア劇場であるフォーチュン座を模したものであり、本格的な地下1階・地上3階の建築物であった。この演劇博物館は、構想段階から12年の歳月を費やし、たびたび建設場所や施設規模の変更などが行われたが、多くの紆余曲折の末に誕生したものである。演劇博物館の開設に関係した人々は、早稲田大学人のみならず多くの学界、演劇界の人々であるが、とりわけ坪内逍遙の演劇にかける熱意と努力が、多くの関係者の共感を得て、開設にこぎ着けたといっても過言ではない。このことは、演劇博物館の名称が「早稲田大学坪内博士記念演劇博物館」となっている事実からも窺える。坪内を中心とする開館までの経緯の概要は、以下の通りである。

坪内が演劇博物館の建設を最初に構想したのは、早稲田大学教授を辞任した翌年の大正5(1916)年と考えられている。坪内は、今後の活動予定を『其折々』(1916)という題で雑記帳に記しているが、「劇の仕事」「シェークスピア研究」といった項目の中に「舞台画(劇画論―演劇博物館設立案―浮世絵と劇画)」という項目が見られる³。坪内は、歌舞伎の史的研究を自らの重要な活動として位置づけ、江戸時代の芝居絵を材料に、歌舞伎の歴史を検証することを考えた。早速、坪内は同年12月に当時の浮世絵収集家で画商の小林文七から、多量の歌舞伎資料と浮世絵を早稲田大学図書館に納品させている。早稲田大学初代図書館長であり、坪内とは東京大学の学生の頃からの親友であった市島謙吉(1860～1944)は、この頃に坪内から博物館を早稲田大学に作りたいという希望を聞き、坪内の夢の実現に尽力することと

なる。

大正12(1923)年、坪内が旧大隈邸内で大規模な演劇資料の展覧会の準備していた折、関東大震災が起こった。その際に坪内は、貴重な資料が焼失した現実直面して、公の場所において資料を保管する必要性を実感したといわれている。当時、坪内はこの旧大隈邸に現在の演劇博物館と同様のフォーチュン座を模した大規模な博物館の建設を考えていたが、その構想も大震災で白紙に戻ってしまう。また、大正14(1925)年、坪内は肺炎で生死の間をさまよったが、この大患の経験が坪内に一刻も早い博物館建設への思いを強めた要因となったことも指摘されている。

その後の大正15(1926)年、坪内の住む熱海に文壇人49名が集まり、坪内の古希と『シェークスピア全集』(1928)の完成が近いことから、その記念として坪内の念願であった演劇博物館を設立する決議が満場一致で行われた。当初は早稲田大学校地から離れた旧大隈邸内に建築する案であったが、大学当局からは、当時が大隈講堂建築中であり、資金集めも困難が予想されることから、既存の早稲田大学図書館の上に1階分を増築し、これをあてるという案が提出された。しかし、坪内はこの大学の案を拒否した。坪内は、図書館ではなく、あくまでも博物館の建設にこだわったのである。

大学側が演劇博物館ではなく演劇図書館として開設を検討していた事実は、坪内らが1929年に演劇博物館設立決議を熱海で行った以前において確認される。すなわち、朝日新聞が報じるところによれば、熱海での決議に先立つ同年5月6日夕刊で、「坪内博士の演劇図書館建設、早大へ寄贈した珍書類を基礎として、門下生等の美しい企て」と題する記事を掲載している。これについて当時の林癸未夫早大図書館長も演劇図書館の具体的な設置場所に言及している。しかし、この話を聞いた坪内は「朝日夕刊、演劇図書館の件、門下生的美挙云々、あまりの間違ひ、例の事ながら不快」と記し不快感をあらわにした⁴。そして図書館への増築案は坪内の拒絶

³坪内逍遙『其折々』より「六 舞台画」(菊地明「一九二〇年代の坪内逍遙の演劇活動とその影響(坪内逍遙没後七〇年・坪内弧景没後一〇〇周年記念)」『早稲田大学史紀要 36巻』早稲田大学 2004 p.261)

⁴ 菊地明「演劇博物館ものがたり」『悲劇喜劇 11月号』浩文社 1978 pp.49～50

にあつて中止となり、軌道に乗りかけた演劇博物館設立は4ヶ月もの期間、停頓状態に陥ることとなる。坪内があくまでも図書館ではなく博物館にこだわった理由は、大学が購入し所蔵している貴重な演劇関係の資料、ならびに自らが寄贈した演劇資料を一般に広く公開することを熱望していたからである。

『演劇博物館五十年』によれば、坪内が大正5(1916)年に歌舞伎資料と浮世絵資料を早稲田大学図書館に購入させた件に関し、「逍遙はこれら夥しい錦絵を一般に公開して、演劇資料として劇研究に役立てようと考えた。少数の研究者のためだけなら図書館でも事は足りる。だが一般に展示し啓蒙するとなると図書館の機能では及ばない。それと他の演劇資料、とくに絵画・物品といったものを考え合わせると、結論は演劇専門の博物館になってしまう」と記されている⁵。演劇研究を広く一般に普及させたいという坪内の信念こそ、大学の方針に対立してまでも博物館建設にこだわる原動力となったのである。

坪内は、昭和2(1927)年になると、シェークスピア全集の完成する昭和3(1928)年を逃すと、念願の演劇博物館建設は不可能になるという思いを持つ。この坪内の思いは、劇壇や文壇にも広がり、6月に有志により演劇博物館設立の趣意書が提出され、発起人が選定される。そして、以後、演劇博物館設立の具体的な動きが見られるようになる。設立に関する事務所は大隈会館内に設けられ、早稲田大学の交友からなる実行委員会が選任された。この委員会では、一時、外国の観光客用に名所にもなるということで日比谷か芝に建設してはどうかとの案も財界関係者から出されてはいたが、それでは坪内に対する記念事業としての側面が薄れるという懸念もあり、早稲田大学校地内に建設する方針が決められた。学内外に広く寄付金の募集が始まり、交友による「坪内博士記念演劇博物館設立期成会」、「大文科交友期成会」も組織された。こうして昭和3(1928)年10月27日、わが国に例を見ない大規模な大学博物館の開館式が、演劇博物館前の広場で坪内逍遙はじめ多くの関係者、来賓のもと執り行われた。

3.坪内逍遙の生涯と演劇博物館の開館

3.1 坪内逍遙の生涯

坪内逍遙は、安政6(1859)年、当時の美濃国加茂郡太田村に代官所付手代の父、坪内平右衛門信之と母ミチの10人兄弟の末子として生まれた。明治2(1869)年、家族とともに名古屋市郊外に移住、この地で歌舞伎に親しみ始めた。名古屋県英語学校(通称洋学校)、官立愛知外国語学校に学び、明治9(1876)年、開成学校普通科に入学しているが、翌年この開成学校は東京大学と改称された。明治16(1883)年、東京大学文学部を卒業、その年の9月、東京専門学校(現早稲田大学)の講師に就く。明治18(1885)年、『小説神髓』(1885)を刊行し、翌年に『当世書生気質』(1886)を出版することで、それまで下級とされていた小説を芸術の域に引き上げるとともに、それを鑑賞する読者の質の向上を呼びかけた。しかし、その後自らの小説家としての限界を悟り、明治22(1889)年の『細君』(1889)の刊行以後は小説の筆を折り、演劇革新の運動をライフワークとした。坪内は明治39(1906)年に、「文芸協会」を設立し、演劇指導に当たった。大正4(1915)年、東京専門学校を名称変更した早稲田大学の教授職を辞した坪内は、民衆劇(ページェント)や児童劇の運動に関わるとともに、シェークスピア研究家としてシェークスピアの翻訳に携わり、昭和3(1928)年、全40巻に及ぶ『沙翁全集』(1928)を完成させている。そして、この完成を記念として演劇博物館が開館したのであった。わが国の文学の近代化と、演劇文化の革新と向上に貢献した人物として高く評価された坪内逍遙は、昭和10(1935)年、76歳でその生涯を閉じた。

3.2 坪内逍遙と演劇博物館

坪内は、わが国の近代文学と演劇の発展に優れた功績を残したが、なぜ演劇専門の博物館を建設しようとしたのであろうか。その要因として二つのことが指摘できる。すなわち、「比較研究者」としての坪内と、「大衆の啓発者」としての坪内である。

坪内は、演劇博物館の開館にあたり、その挨拶で演劇博物館を開設した動機を明確に述べている。

⁵早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館五十年』早稲田大学演劇博物館 1978 pp.130～131

「劇の成立を、先づ社会学的に、否、人類学的に深く遠く根本的に研究することが第一義とならざるを得ません。で、あるとすると、其為の準備としては、世界どうの劇を古今を一貫して比較研究することが最も緊要な事となります。随って、さういふ材料や文芸を或一箇所に蒐めておいて、同時に対照し検覈する為の便宜に供したいといふ希望が生じます。私が、演劇博物館の設立を切望いたしました動機は、即ちここに在つたのです⁶」。

坪内は、国内外の演劇に関する資料を一堂に集め、それらを比較検討することが、演劇の根本を理解するためには必要不可欠であると考えた。もともと坪内は、文学における比較研究の先駆者とされ、東京専門学校で教鞭を取ったときも、「比照文学」の講義を持ち、国内外の作品を比較検討していた。

坪内の文学における比較研究は、東の『西遊記』と西の『天堂遡源』、東の『武蔵あぶみ』と西の『倫敦大疫病の記』などの東西の小説を取り上げ、それぞれの類似点と相違点を考察するものである。二階堂は、坪内を「比較研究の草分け」と位置づけながら、その研究は「日本固有の文化、文学に西洋の理論をあてはめ、優劣をつけることはできない。日本文学は西洋文学と対等に比較対照されるべきだ—という確信を（坪内は）得たのではあるまいか」と述べている⁷。二階堂が指摘するように、坪内は日本文学の本質を世界中の文学との比較により導き出すことを試みた。

演劇博物館開館の際の坪内の挨拶は、演劇博物館の設立の動機を明言しただけでなく、まさに比較研究の姿勢を示したものである。坪内の「世界中の資料を比較検討する」ということは、演劇の本質を知る上で欠かせないものであった。

さらに坪内は、この演劇博物館が単に早稲田大学の研究・教育に使用される施設に限定されるものではなく、わが国を代表する博物館として、日本文化、世界文化に貢献する公の施設であることを希望して

いた。前出の開館時の坪内の挨拶には「此物容れ場が、早晚、わが国のために、又、世界列国のために、まさに来るべき新文化的要素を養ひ育てまする揺籃たるの役目を務めまする日のあるべきを私はひそかに期し且つ信じてをります」とある。坪内は、この大学博物館が一私立大学の枠を超え、人類の文化財を広く収集公開する施設として活動することを望んだのであった。そしてそこには「民衆劇」運動に見られるように、常に大衆に目を向けていた坪内の教育に対する姿勢が強く示されていたと考えられる。

坪内は、早稲田大学教授職を辞した後、大正 9（1920）年に「文化事業研究会」を結成し、早稲田大学内に事務所を置いた。この大学から独立した組織は、坪内がかねてから抱いていた「新民衆演劇」「社会の芸術化」論を推進することを目的としたものであった⁸。この発会式において坪内は、社会本位としての芸術を生み出すことがいかに緊要であるかを強調している。この研究会は二年ほどで幕を閉じるが、坪内の広く社会に浸透する芸術の理念は、「民衆劇」（ページェント）によって実践されていく。大正 10（1921）年、坪内は居住する静岡県熱海町において「熱海町の為のページェント」と題した演劇を中心とするイベントを開催した。この 10 月 2 日のイベントは、日本で最初のページェントといわれている⁹。このように、坪内は常に大衆に意識を向けた芸術家であった。そして演劇博物館の開館も、大学のためだけではなく、開館当初から一般公衆に文化を発信するものであった。それは、この博物館が日曜祝日を含め、広く無料で一般に公開されていた事実からも明白である。

4. 坪内逍遙と大学博物館

次に、坪内がなぜ一般博物館ではなく、早稲田大学内に演劇博物館を作ったのであろうか。坪内には

⁶早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第一号』早稲田大学演劇博物館 1929 p.3

⁷二階堂邦彦「坪内逍遙における比較論の出発」『演劇学 第三号』早稲田大学演劇学会 1990 p.200

⁸坪内逍遙「年譜」の大正九年の項には「文化事業研究会を起こし」とあり、菊地はこれを「新民衆劇」「社会の芸術化」論を早急に推進しようとしたためと述べている。（前出 菊地明「一九二〇年代の坪内逍遙の演劇活動とその影響」2004 p.269）

⁹前出 菊地明「一九二〇年代の坪内逍遙の演劇活動とその影響」2004 p.286

早稲田大学に演劇の講座を開きたいという希望があった。それは、演劇を学問の領域に引き上げ、演劇が人類の重要な文化であることを示したいと願ったからに他ならない。市島は「逍遙が言う、現今、ある大学では学生に演劇を指導するため、校内に舞台を作りつつあるという。これは最早時勢の動きだ。早大においても演劇の講座を設ける計画がなくてはならぬ¹⁰」と記録しているが、坪内は、演劇を単なる娯楽ではなく、芸術として学問的に研究する分野であると考えていた。そして、早稲田大学にその講座を設けることで、演劇研究の道を切り開こうとしたのである。演劇博物館は、世界中の演劇資料を収集し、比較検討することを目的として開館されたのであった。

当初、坪内は一般公開されていた大隈旧邸敷地内に演劇博物館を開設することを考えていた。その構想は、建物は現在の演劇博物館と同じフォーチュン座を模したもので、学生らによるシェークスピア劇を始めとする各種の演劇上演が可能なものであった。また、演劇展覧会も催し、絵葉書やレコードなどの販売物も置くという、まさに博物館として十分な規模のものであった。坪内により、旧大隈邸内に演劇博物館を設立し、同時に大学内に演劇の講座を置くことを相談された前出の市島謙吉は、坪内の意見に賛同した。市島の見解は、演劇講座を大学に設けることによって、演劇博物館の建設や活動費用に対する理解も得られる可能性が高い、と言う判断に基づくものであった。菊地は、この間の事情を次のように指摘している。

「市島はこれを受けて、坪内のいうように、学校の文科に演劇の一講座を開くまで奮発すれば、この経営も甚だ意義を生ずる。五千円の経費必ずしも惜しむに足りず。全体演劇の事今尚一般に諒解せられず、懸念すべきは誤解を内外に起こさないことである。(中略) 保守の徒は芝居を卑賤の遊戯と見做すが故に、誤解は今もおこりがちだ。それを除くためにも、学校に演劇の講座を置き、はっきり演劇が文化上必要機関であることを示すのは肝要だと逍遙に応

じ、両者大いに意気投合した様子が窺える¹¹」。

菊地が「保守の徒は芝居を卑賤の遊戯と見做す」と述べているように、当時の演劇は娯楽と考えられ、学問として研究される対象ではなかった。この時の旧大隈邸での博物館構想は、大正 12 (1923) 年の関東大震災により白紙になってしまったが、市島らの努力によって 5 年後の昭和 3 (1928) 年に、早稲田大学構内に当時他に類を見ない大規模な大学博物館が開館されるのであった。

このように坪内にとってこの大学博物館は、それまで単なる娯楽と考えられていた演劇を、人類の文化として学問分野に引き上げる契機を作るものであった。大学に演劇の講座を新設するために、まず大学に付属博物館を作り、人々や大学人に演劇が博物館で展示・研究される重要な文化であることを啓発する必要があった。そして、演劇を学ぶ学生にこの博物館で実演させることで、実践経験を身に付けさせることが可能となるだけでなく、演劇に関する幅広い資料を所蔵することで、さまざまな演劇を比較研究することもできたのである。坪内は、大学の図書館に新たに加えられる程度の演劇図書館ではなく、演劇を学問に引き上げるために、あくまでも大学付属博物館の開設を目指したのである。こうした坪内の夢と希望は、その後も早稲田大学内で確実に受け継がれていくのである。たとえば、昭和 26 (1951) 年度に早稲田大学が文学科芸術学専修を廃止し、新たに演劇専修と美術専修の二つの専修を設置したこと、現在でも早稲田大学内に演劇学の多くの研究会が常設されていることから理解されよう¹²。坪内は、その生涯をかけて演劇文化の向上のために尽力したのである。

5. 演劇博物館の活動

坪内が設立した演劇博物館は、開館当初から積極的な活動を行い、その社会教育機能の充実が目を見張るものとなった。開館時間は、午前 9 時から午後 4 時であり、日曜と祭日が連続する場合は第 2 日目

¹¹前出 菊地明「一九二〇年代の坪内逍遙の演劇活動とその影響」2004 p.307

¹²早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史 第四巻』早稲田大学 1992 p.941

¹⁰前出 菊地明「一九二〇年代の坪内逍遙の演劇活動とその影響」2004 p.307

が休館となった。閉館日は月曜日と祭日の翌日及び8月中が閉館であるが、入場料は無料であった。当初の入館者数については、『演劇博物館 第三号』において、「本館の如きは全く専門的なものであるから、徒らに入館者、観覧者の多きを望むことは欲しない積りである」と断りながら、「社会教育の一大機関として普及利用に努むべきものである以上は、全く入館者数に就いて無関心である事は亦間違っていると云はねばならない」と、入館者数の統計の重要性が指摘されている。開館から翌年までに記録されている入館者数は、以下の通りである。

展列	開館日数	入館者	一日平均 入館者
昭3年10月～11月	23日	8,944名	389名
昭4年1月～3月	56日	4,797名	86名
昭4年4月～6月	73日	14,010名	192名
8ヶ月 合計	152日	27,751名	183名

昭和3(1928)年10月末の開館以来、約2ヶ月の休館がありながら、8ヶ月間に約28,000人の入館者があった。入館者の内訳は、学生15,787名、一般男子10,640名、一般女子1,328名となっており、全見学者の4割以上が一般の人々であり、多くの学外者が見学していることが分かる¹³。

当時の大学博物館は、東京帝国大学や京都帝国大学、北海道帝国大学などに学内利用の資料館として存在する程度であり、広く一般に公開された大学博物館は、わが国ではこの演劇博物館が最初であった。この演劇博物館における見学者の約半数が一般の人々であったことは、大学博物館が単に高等教育に資する資料提供の施設を意味したのではなく、一般の人々も利用できる「開かれた」施設でもあったという新たな大学博物館の可能性を提示したものであ

った。前出の『演劇博物館 第三号』には、「社会教育の一大機関として普及利用に努むべきものである」と自らを位置づける言葉があるが、これは、この大学博物館が、開館当初から社会に開かれた公の施設であることを自覚していたことを裏づけている。まさに、わが国初の研究機能だけでなく、教育機能を伴った大学博物館の誕生である。そして、そのために演劇博物館は一般公衆に対して幅の広い活動を行っている。演劇博物館の開館から2年間の活動は、以下の通りである¹⁴。

昭和4(1929)年

- 4月 『演劇博物館第二号』発行
- 4月 坪内博士脚本朗読会
- 5月 宝塚国民座劇
- 7月 『演劇博物館第三号』発行
- 9月 『演劇博物館第四号』発行
- 10月 能狂言と講演の会
- 10月 歌舞伎劇場図展览会(有料)
- 10月 守田彌勘 水谷八重子一座劇
- 11月 名映画鑑賞会
- 12月 『演劇博物館第五号』発行

昭和5(1930)年

- 2月 『演劇博物館第六号』発行
- 4月 歌舞伎座観劇会
- 4月 『演劇博物館第七号』発行
- 4月 シェークスピア祭講演と実演と映画
- 5月 坪内博士家庭用児童劇
- 7月 『演劇博物館第八号』発行
- 11月 各地郷土芸術公演
- 11月 演劇博物館略誌発行
- 11月 歌舞伎座観劇会
- 12月 『演劇博物館第九号』発行
- 12月 向上会主催演劇講演会

演劇博物館の開館後における2年間の活動内容は、年に4回の館報の発行、朗読会、講演会、映画鑑賞会、観劇会などであり、一般向けの講座類の開催で

¹³早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館 第三号』早稲田大学演劇博物館 1929 p.6

¹⁴早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第九号』早稲田大学博物館 1930 p.4

あった。また、特別展覧会などの企画展も開催し、来館者へのサービスを行っている。

ところで、このように広く学外に公開活動を行うためには、十分な職員数が必要で、そのための経済的な基盤が欠かせない。演劇博物館には、博物館専任の職員が置かれ、組織的基盤が確立されていた。開館当初の職員は、館長金子馬治、副館長河竹繁俊を始め館員として伊達豊、高安克己、片田江全雄、錦織春雄、以南高一、大久保信子の6名が配置され、さらに給使5名、小使3名の計14名で組織された¹⁵。

また、経済的基盤も確保され、演劇博物館は開館直後の昭和4(1929)年1月27日に「演劇博物館後援会」を組織し、規定により賛助会員は年5円を、特別賛助会員は年10円あるいは100円以上の一時金の納付を義務づけた。昭和3(1928)年当時は一ヶ月の新聞代金が1円と記録されており、1円は現在の3,000～4,000円程度と考えられる。また、早稲田大学からは経費として年15,000円も支給されている¹⁶。この後援会は、昭和5(1930)年には「財団法人国劇向上会」として改組され、より確固なものになった。また、演劇博物館は開館当初から販売物も取り扱っており、当時の「博物館みやげ」を見ると、絵葉書6枚セット20銭、博物館全景入り文鎮50銭とある¹⁷。年4回の館報『演劇博物館』も一部10銭で販売されていた。このような堅固な組織的基盤に加え、後援会や母校からの安定した支援、そして販売物からの収益などが、利益を目的としない学外公開や活発な教育普及活動の実現を可能にしたと考えられる。

また、昭和4(1929)年10月1日より館内に演劇図書も設置され、図書資料の閲覧が可能になり、博物館はライブラリーを併設する本格的な施設へと成長を遂げることになる。

6. 演劇博物館開館が与えた影響

¹⁵ 早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第二号』早稲田大学演劇博物館 1929 p.14

¹⁶ 早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館 第五号』早稲田大学演劇博物館 1929 p.14

¹⁷ 早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第六号』早稲田大学演劇博物館 1930 p.24

6.1 演劇博物館開館の歴史的意味

わが国の大学博物館の黎明期は、明治10(1877)年に最初の大学である東京大学が誕生した時点に遡る。東京大学では、江戸幕府が開園した「小石川御薬園」を明治10(1880)年の東京大学設立時にそのまま受け継ぎ、「東京大学大学院理学系研究科附属植物園」通称「小石川植物園」として開園している。また、英国人ヘンリー・ダイヤー(Henry Dyer 1848～1918)が学生の研究用に明治11(1878)年に「生徒博物館」を設けたという記録もある¹⁸。正式な東京大学付属の施設として公報に記録されているものは、米国人エドワード・シルベスター・モース(Edward Sylvester Morse, 1838～1925)が発案し、明治13(1880)年に開設された東京大学理学部博物場と考えられるが¹⁹、この博物館は5年間の活動で明治18(1885)年に閉鎖されてしまった。

その後明治30(1900)年に誕生した京都帝国大学は、のちに文学部に陳列館を置いた。この館は大正3(1914)年に最初の建物が作られ、3回にわたる増築を経て昭和4(1929)年に完成している。また大正7(1918)年に誕生した北海道帝国大学は、以前の札幌農学校時代から使用していた札幌博物場(旧開拓使札幌仮博物場)を、付属の博物館として活用した。

このような草創期の大学博物館は、あくまでも学部付属の陳列館であり、独立した組織や運営基盤を持つものではなかった。しかし、その後誕生した早稲田大学の演劇博物館は、開館当初から確固な組織と経済基盤を持つ本格的な大学博物館であった。また、演劇博物館の開館により、大学博物館には特定分野の資料を国内外から広く収集し、その分野の学問形成と学問普及に貢献するという新たな目的が提唱された。

¹⁸ 荒俣宏・養老猛司・黒田日出男・西野嘉章『これは凄い東京大学コレクション』新潮社 1998 p.119

¹⁹ 『文部省第八年報 明治十三年』には「博物場設置ノ件」として、「明治十三年三月三十一日東京外国語学校敷地内ニ在ル本部金石地質生物學標品陳列場ヲ博物場ト改称シ」とある。(『文部省第八年報 明治十三年』1880 p.450)

前述の通り、演劇博物館以前の大学博物館は、旧帝国大学にいくつか存在したが、その中でも小石川植物園などの既存の施設をそのまま実習用に転用した施設を除くと、それらの大学博物館の収集は「学内の教育研究で生成された資料」が対象であり、「日本国内の資料」であった。東京大学理学部博物館は、モース教授などの採集した動物学・植物学資料と、同じく授業の一環で収集された考古学資料が所蔵されていた。京都帝国大学文学部陳列室は、古文書や美術品など、国内の文化財を展示するものであった。北海道帝国大学農学部附属博物館の資料は、屯田兵により狩猟された動物類や、学生らにより製作された生物学の標本類が中心であった。

そのような中で早稲田大学の演劇博物館は、坪内らが収集した国内演劇の資料が中心であったとは言え、世界各地の演劇関係資料も所蔵し、それらを国際的に比較検討することを目指した博物館であった。昭和4（1929）年1月発行の『演劇博物館第一号』の「展示目録」には「第一室 欧米の代表的演劇図集」と始まり「第二室 芝居錦絵版式のいろいろ」と各展示が紹介されている。また「欧米の代表的演劇図集」には、34の海外のさまざまな劇場の計132の劇場図が展示された²⁰。このようにこの博物館は、開館当初から国内の文化財を保管展示するだけでなく、広く海外の演劇資料を収集し展示していた。このような大学博物館は、当時は早稲田大学の演劇博物館のみであった。演劇博物館がイギリスのフォーチュン座の建物を模した点も、国際的な視野でこの博物館を活用しようとしたからであると考えられる。

さらに、特定分野の学問の普及のために、大学博物館は広く一般にも公開される施設であるという考えが提唱された。演劇博物館は、開館当初から、日本の演劇文化を内外に発信する、公の博物館であるとの意識が定着していた。この博物館開設にあたった最も重要な人物、坪内逍遙は、すでに指摘した開館式の挨拶で、シェークスピアが単に一国民の作者では無く、万国民の作者であったことを例に、この博物館も広く世界に貢献する博物館であることを訴

えている。

また、当時の早大総長高田早苗は『演劇博物館第四号』の中で、「演劇博物館の使命」という題で、「此の演劇博物館は、早稲田大学構内にあるけれども、勿論早稲田大学のための演劇博物館ではない。その使命は、広く演劇の為に貢献するといふに在って、従つて出来る限り開放主義をとり、世間一般、殊に演劇の進歩発達のために利用することの出来るやうにしなければならない」と記している²¹。大学当局も、この博物館を私立大学の財産としてよりも、日本国民、人類の財産として活用し、広く開放することを望んでいた。『演劇博物館第五号』には、「早稲田大学は其管理に任じてをりますが、公益機関として社会に無料で開放してゐます」とあり、公益機関であることを公表している²²。

以上のように、わが国最初の本格的な大学博物館の開館により、大学博物館は一大卒を超え、わが国を代表する博物館として、広く社会に開放されるべきであるという教育理念が明確に提唱されたのであった。

6.2 演劇博物館開館の影響

次に、早稲田大学演劇博物館の開館がわが国の大学博物館に与えた影響も考察しておきたい。明治大学は、昭和4（1929）年4月に明治大学刑事博物館を開館しているが、同博物館は現在でも「明治大学博物館」として活発な活動を行っている。明治大学も、早稲田大学同様に、専門分野の資料を比較検討することが重要であるとの認識から大学博物館を開館している。

当時の「刑事博物館設立ニ付謹告」には、「古今東西ノ犯罪、行刑、裁判其他刑事関係ノ参考品ヲ蒐集陳列シ以テ刑事学ノ研究ニ資スルコト」とその目的が述べられている²³。また、この博物館は、開設当初は演劇博物館とは異なり、学内利用機関として

²¹前出 早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第四号』1929 p.7

²²前出 早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第五号』1929 p.13

²³伊藤秀明「明治大学刑事博物館の誕生」『明治大学博物館研究報告第2号』明治大学博物館事務室 1997 p.108

²⁰早稲田大学演劇博物館編『演劇博物館第一号』早稲田大学演劇博物館 1929 p.7

活動を行ったが、将来は一般公衆にも開放することを視野に入れていた。昭和 4 (1929) 年 5 月の「博物館並類似施設主任者協議会」において、刑事博物館の活用が学内のみなのかとの質問に対し、当時の刑事博物館主任委員大谷美隆は、「一般の人にも行く行くは開放したいと思ってゐるが只今ではさういえない。性質が性質故たとへ将来でも一般の人々には全部の展覧はゆるされないかも知れないが、ある専門的なものを除いては、なるべく一般にさうしたい希望を持ってゐる」と答えている²⁴。

明治大学も、早稲田大学同様に専門分野の資料を集め、学問的に比較検討する施設として大学博物館を作り、将来それを社会に公開することを考えていた。明治大学刑事博物館は、終戦後の昭和 29 (1954) 年 6 月 1 日より毎週火、木、土の午前 10 時より午後 4 時まで一般公開を始めている²⁵。

このように、早稲田大学演劇博物館開館後、わが国では社会に開かれた大学博物館が普及する機運が生まれた。しかし、残念なことに、わが国が戦時体制に移るにつれ、大学と社会との接点を広げようとする動きは停滞していく。明治大学刑事博物館以後、終戦まで本格的な大学博物館の開館は見られない。再び大学博物館が普及するのは、終戦後、昭和 23 (1948) 年から誕生する新制大学を待たねばならなかった。戦後、昭和 25 (1950) 年の天理大学の誕生とともに天理大学天理参考館が開館しているが、この天理大学天理参考館は、早くから一般に広く公開され、「博物館友の会」も設立された本格的な大学博物館であり、演劇博物館に継ぐ開かれた大学博物館ということが出来る。

7. おわりに—演劇博物館開館の歴史的意義

早稲田大学演劇博物館が、戦前においてこのような高度な大学博物館を開館した歴史的事実は、単に注目し値するという意味ではなく、その設立の意義を歴史的に評価することが重要である。この大学博

物館は坪内逍遙の強い熱意により開設され、その活動も坪内の教育観を強く反映したものであった。この大学博物館開館の歴史的意義は、第一には「確固な組織と経済基盤を持つわが国で最初の大学博物館である」こと、第二には「特定分野を対象に国際的視野で比較検討する新たな大学博物館像を提示した」こと、第三には「社会教育機関として広く社会に開かれた初めての大学博物館」であることの 3 点であった。演劇博物館の開館は、それまでの大学博物館が大学における研究・教育機能という側面だけを担っていたのに対して、新たに広く社会に開かれた社会教育機能という側面を付加した点が注目されなければならない。

それまでのわが国の大学博物館は、学部などの付属施設として、学生や教職員の教育研究に役立てる資料を提供するものであった。そこでは大学での教育研究で生成された資料や国内の資料が保管展示されていた。しかし、演劇博物館は、独立した組織と後援会を持つ初めての大学博物館であり、国外からも資料を収集し、国際的視野で比較検討する大学博物館として誕生した。演劇博物館は、特定の専門分野の資料を国内外から幅広く収集し比較検討する新たな大学博物館像を提示したといえる。早稲田大学演劇博物館の開館は、現在の一般博物館にも引けをとらない本格的な大学博物館の誕生を意味したのであった。

(Received: May 31, 2010)

(Issued in internet Edition: July 1, 2010)

²⁴前出 伊藤秀明「明治大学刑事博物館の誕生」1997 p.114

²⁵明治大学刑事博物館委員会編『明治大学刑事博物館目録 第 6 号』明治大学刑事博物館委員会 1954 「お知らせ」